

# 教育情報コーナーからのお知らせ



3月は、別れの月ですね。さびしさもありますが、新しい出会いに期待も膨らみます。「先生」との思い出は一生のモノ。皆さんしっかり記憶しています。そんな本を紹介。短歌・俳句にも卒業を歌ったこんな名歌がありました。

## 『わたしの先生～人生を変え、人生を支えた心の師』

(読売新聞教育取材班編)

- \*「あの人にも、こんな先生が」と、読んでいて親しみを感じます。先生の生徒に向けるまなざしの温かさ、それに加えて観察のするどさに感心します。

## 『わが師の恩』

(週間朝日編)

- \*人は人生でさまざまな出会いをします。その中で生きていく上で大きな影響を受けた人が必ずいるのではありませんか。出会いが人を変え、新たな力を生み出します。

## 『こころに響いた、あのひと言』

(「いい人に会う」編集部編)

- \*各界で活躍中の52人の、こころに響いたあの一言。それぞれに、感動的な人生ドラマが秘められています。そこに込められた優しさ、思いやりに胸うたれます。

## 『「将来」のヒント～賢者たちの教育論』

(文部科学省編)

- \*雑誌「生涯学習」に連載されたインタビュー記事がまとめられています。堅苦しくなく、しかし情熱にあふれたメッセージが語られています。胸にひびく「言葉」と、真摯な姿にあふれています。



釈 迢空 (しゃく ちょうくう)

明治 20 (1887)～昭和 28 (1953)

## 桜の花ちりぢりにしも わかれ行く 遠きひとりと 君もなりなむ

【解説】「卒業する人々に」と題した作。毎年、桜の花が散るころ、教え子たちは卒業して私のもとを去ってゆき、ちりぢりになって再び会うこともないが、君もそうなるのだろうか、と教え子との別れを惜しむ歌である。

中村 草田男 (なかむら くさたお)

明治 34 (1901)～昭和 58 (1983)

## 校塔に鳩多き日や卒業す

【解説】校塔に集う鳩は巣立っていく卒業生の象徴であり、平和の象徴である。

作者は神経衰弱で休学したため、大学を卒業したのは32歳の時。卒業に寄せるおもいもまた格別。



山畑 祿郎 (やまはた ろくろう)

明治 40 (1907)～昭和 62 (1987)

## 卒業証書まるめて覗く青き天

【解説】卒業証書という感傷的になりがちな季語を軽やかなさではぐらかし、二度と帰らない若さと歓びを際立たせている。印象鮮やかな青春性に満ちた句。